

プラグマティズムと形而上学

—— C・S・パースを中心に ——

石田 正人

I. はじめに

哲学若手研究者フォーラムへお招き頂いたことに御礼を申し上げます。現代のアメリカ哲学では、「形而上学的 (metaphysical) である」というと「根拠のない独断的な主張」といった否定的な含みが強いと思いますが、C・S・パース (1839-1914) から J・デューイ (1859-1952) に至るまでの古典的なプラグマティズムには、自由かつ大胆な形而上学的思考が認められ、科学哲学の発展と歩みを共にしつつも、壮大な世界観を表明するに至っています。とりわけパースが分析哲学の黎明期に構想する形而上学は、論理学史からみればごく自然な展開を示しているだけでなく、近代ヨーロッパの哲学、とくにドイツ哲学との概念的な連続性を保持しています。プラグマティズムを含む古典アメリカ哲学の形成は、ドイツ哲学の受容と修正を抜きにして理解することは難しい、と言ってもよいと思います。そこで以下では、I・カント (1724-1804) の哲学を背景とする初期パースによる 1867 年の論考「新しいカテゴリー表について (On a New List of Categories)」(以下「新しいカテゴリー表」と略す) を考察することから始めて、その後で、円熟期のパースが 1898 年の連続講演で導入した「黒板」の比喻を G・W・F・ヘーゲル (1770-1831) との関連で考察します。つまり「新しいカテゴリー表について」と「黒板の比喻」とがこのレクチャーの二つの中心素材です。また以上を考察するに際して、アメリカ哲学の周辺の動きにも目を配りたいので、W・ジェイムズ (1842-1910)、A・N・ホワイトヘッド (1861-1947)、J・デューイなどにも言及したいと思います。さらに、パースがカントやヘーゲルを通じて考察した問題群の多くは、現代の哲学においても色々と形を変えて現れておりますので、具体例として L・ウィトゲンシュタ

イン (1889-1951) やM・タイ (1950-) の考察を俎上に載せたいと思います。それでは、宜しく願い申し上げます。

II-1. 「新しいカテゴリー表」における 「概念 (conception)」について

1867年、28歳のパーズが発表した「新しいカテゴリー表」は、全体で10頁ばかりの短い論考であるが (W2: 49-59/CP 1.545-559 [1867]¹)、パーズは生涯を通じてこの作品を非常に高く評価した。その執筆中には、「世界に対する私の贈り物、私が死んで忘却の彼方へ沈んでも、私はその中で生き続けるであろう」 (W 2: 1 [1867]) と記し、三十数年後には自らの夥しい著作のなかでも「論理的な観点からみて、おそらく最も不備の少ないもの」 (MS 787: 33/ CP 2.340 [c.1899]²) と述懐、さらに後年には、「哲学に対して私が為した一つの貢献 (my one contribution to philosophy)」 (MS L 67: 16/ CP 8.213 [1905]) あるいは「全哲学のなかでも最も完全なる宝石の一つ」 (MS L 224: 73 [c.1905]) と述べている³。同作品が、カント批判哲学との何年にもわたる格闘の末に執筆されたことは、アメリカ哲学史のなかでは比較的良好に知られている。とくに『純粹理性批判』についてのパーズの発言をまず幾つか引用しておこう。おそらく最も有名なのは、「私は3年以上にわたって、書物全体を暗記するに至るまで、毎日2時間をカントの『純粹理性批判。』の勉強にあてたのであり、同書の全ての節を批判的に検討し終えるに至っていた」 (MS 867: 3/CP 1.4 [c.1895]) という言葉であろう。また晩年に近くなっても、「カントの『純粹理性批判』は、哲学における私の離乳ビン (my philosophical weaning-bottle) であり殆ど暗記していた」 (MS 320:37 [c. 1907])、⁴「私は[カントの]批判書を両版において殆ど暗記していた。それは私のバイブルに等しかった (little short of a Bible to me)」 (MS 619:10 [c. 1909]) 等とパーズは回想している。

このようなカントとの批判的対話を経て完成された「新しいカテゴリー表」は、凝縮された独特の難しさをもち、その全体を以下で論じることがとても出来ないが、基本的な考え方は冒頭の数節にすでに表れている。パーズは「新しいカテゴリー表」を次のように書き起こしている (W 2: 49/CP 1.545 [1867])。

§ 1. 本稿は、すでに確立されている理論 (the theory already established) に基礎をもっており、その理論とは、諸概念 (conceptions) の機能は、感覚印象の多様 (manifold of sensuous impressions) を統一 (unity) へともたらしことに存すること、またある概念の妥当性 (validity) は、その導入なくしては意識内容を統一性にもたらしことが不可能であることに存する、という理論である。

ここで「すでに確立されている理論」とは、カント『純粹理性批判』の大枠のことであり、また「新しい」カテゴリーとは、カントの悟性概念に対して「新しい」という意味であるが、認識の成立や思考の形成過程を導く範疇的な働きを探るという意味では、パースはヘーゲルも念頭に置いていてと言ってよい⁴。パースが、明確にカントないしドイツ観念論寄りの〈概念〉に言及するときは〈concept〉の語をより頻繁に使い、自分の意味での概念、即ちより広い意味での概念的な働き一般を指す場合は、〈conception〉の語を多く当てるので、ここでパースはすでに自分のカテゴリーの話をしている。この非常に短い第一節に続けて、次のように言われる (W 2: 49/CP 1.546 [1867])。

§ 2. この理論は、普遍的であるような諸概念には、漸次的推移 (gradation) がある、という概念を導くものである。ある概念が感覚の多様 (the manifold of sense) を統一し、[今度は] その概念 [自身] とそれが適用される多様とを統一するさらに別の概念が必要とされうる、といった具合にであり、以下、同様である。

著作としてみた場合、「新しいカテゴリー表」はきわめて分かりづらい箇所が多い論考であるが、上の第一文では、経験的な統覚の只中で一次的に機能する「諸概念」と、今度はその一次的な諸概念そのものに関わる「段階的推移」という二次的 (あるいはメタ的) な概念とが、どちらも断りなく「概念 (conception)」と言われている。前者は、さしあたり悟性的な機能を拡張ないし一般化したものとしての概念と理解することが出来るが、後者は、導出されるべきカテゴリーの個数あるいは密度 (カテゴリーの集合を考えた場合、その集合の濃度とい

ってもよい)に関する主張であり、〈統覚は有限の段階的ステップを経て成立するものである〉という根本的な主張を含んでいる。これは、カントもヘーゲルも暗黙のうちに前提していた事ではあるが、〈有限のステップ〉という側面を強調するならば、数学者として鍛えられていたパースの感覚があえて有限主義的な一言をもたらした、といった見方も可能であろう。

さて「新しいカテゴリー表」は全15節からなるが、その中心テーマである「概念」の働きの基本性格を捉えるために、その数節についてのみ、さわりの部分に目を向けよう。第3節では、概念的な働きがあらわれる端緒について、パースは次のように述べる (W 2: 49/CP 1.547 [1867])。

§ 3. 感覚に最も近い (nearest to sense) 普遍的な概念 (universal conception) は、現前一般 (*the present, in general*) である。これは普遍的であるから、概念である。

少し比喩的にいえば、感覚の多様は「現前一般」という概念のもとで最初の地ならしをされる。この原初的な統一態は、数行後に「それ一般 (IT in general)」 (*ibid.*) とも呼ばれるが、カントでいえば、超越論的客体「対象=X」の立ち現れる以前の段階に位置づけられており、命題構造がないので知識内容も存在しない。また二文目では、〈普遍性をもって概念性の規準とするならば、これですら概念であろう〉という概念性の規準が念押しされている。これは、瑣末なコメントに見えるかも知れないが、カントとの重要な違いを含意する視点となっている。パースが問うているのは、まさに事象の現前性のみであり、感覚にもっとも近接する概念を取り上げるにしても、時間、空間、またそれらと関わる感性的能力のいずれもパースは問題にしない。すなわち普遍性を厳密な規準とした上で、時間や空間の形式が普遍的である、と主張するならば、現前性に含まれる時間や空間もまた概念的 성격が強いとの見地が反映されている。

そこで「概念」と訳すほかない二つの語彙〈concept〉と〈conception〉とのニュアンスの相違に注意を払うことが望ましい。「新しいカテゴリー表」のなかで「カテゴリー」というとき、パースは、感性的な経験の流れの中へ小石のように〈concept〉が投入されて知的な構造化が生じる、とは考えていない。むしろ構

造化する一般的傾向性を持つのは流れそのものであり、経験の各局面において同定可能であるような構造的な特徴を次々に発現させ、それらをさらに統合してゆく機能様態を一括して〈conception〉と称している⁵。このように経験が思考と渾然一体となって流れるという考えは、W・ジェイムズの哲学にも顕著である。パースと同郷かつ高校時代からの友人であったジェイムズは、「新しいカテゴリー表」の約23年後に、匿名の「思考の流れ (the stream of thought)」という考えを強調するが、そこでは《私は考える》というコギトが消失している。ジェイムズは次のように言う。

〈雨が降る (it rains)〉あるいは〈風が吹く (it blows)〉と英語で言うように、〈それは、思考する (it thinks)〉とすることが出来れば、最少の仮定で最も簡単に事実を述べる事が出来よう。だが、そういう英語表現はないので、私たちは〈思考が進んでいく (thought goes on)〉と言うしかないのである⁶。

ジェイムズもパースも根本的な「事実」を捉えようとしている。目指されているのは、背後に自我論が想定される「受動的総合の哲学」ではない。後年、ジェイムズはいわゆる〈根本的経験論 (radical empiricism)〉を唱え、多元的経験は相互に接続しつつ勝手に連なっているというある種の自律的総合の哲学を展開するに至るが、〈経験は、個人に帰属する以前に、世界そのものを自ずと構成している〉という見地がジェイムズとパースに共通している。何らかの〈主体〉があって、それが〈経験〉というものを有するのではなく、むしろ事象のなかに主体性が様々な度合いであらわれる。だからパースは「新しいカテゴリー表」の翌年には次のように述べている。「身体の中に運動が置かれているのではなく、運動の中に身体が置かれているように、私たちはこう言わねばならないだろう、私たちが思考の中にあるのであって、私たちの中に思考があるのではない」(W 2: 227/ CP 5.289 n.1 [1868])。このようにしてみると、広い意味でのカント主義を継承し、また遠景にはヘーゲルを思い描きながら事象の普遍的な蝶番となるカテゴリーを探索しつつも、パースはやはりドイツの伝統ではなくアメリカ哲学の側に立っており、それが「新しいカテゴリー表」における「概念 (conception)」の働きの捉え方にも反映されている、と見ることができよう。

II-2. 「新しいカテゴリー表」とカント哲学からの隔たり

さて欧米のパーズ研究をみると、初期 1860 年代のパーズについては、カントからの明らかな影響を認め、中期 1880 年代以降のパーズについては、むしろカントの影響を脱してヘーゲルに近づいて行った、とみる向きが強いようである。しかし、これは話を単純化しすぎている。第一に、「新しいカテゴリー表」のパーズが、カントに同意しない点が等閑に付されがちであり、第二に、パーズが早くからヘーゲルを読んでいたことを多少とも軽視しており、第三に、パーズが晩年に至るまで一貫してカント主義者であった事実を覆い隠しがちである。最後の点については、死の前年のパーズがカントをなお「すべての哲学者のなかで最も偉大な哲学者 (the greatest of all philosophers)」(MS 682: 57 [1913]) と評していることを指摘するととどめよう。パーズのヘーゲル理解については後述するとして、ここで敢えて際立たせておきたいのは、「新しいカテゴリー表」におけるパーズが、カントと意見を違える点である。初期パーズのカントからの離反を説明するのはそれほど容易ではないが、「新しいカテゴリー表」第 15 節の次の言葉は、パーズによるカントの受容と修正の跡を示している。パーズは、「悟性 (understanding)」について次のように述べる (W 2: 56/CP 1.559 [1867])。

§ 15. [中略] それゆえ、この見方によれば、論理学の領域の定義において、[カントの場合のように] 悟性への関わりは [そもそも] 言表されるに及ばない、なぜなら、それ [悟性] は、この領域に何ら制限を加えないからである。

これも圧縮された議論で即座にはわかりづらいが、パーズはおよそ次のように考える。もしカントの主張するように、悟性の諸法則が知識と实在の正当な範囲である現象界・事象界の隅々まで行き渡っているならば、個々の部分領域でコギトないしカント的な《私は考える》によってそのつど現象が成り立つ、と考える必要はない。論理法則が普遍性をもつならば、《私は》という一人称の主語に関わりなくそれが成り立つことは言うまでもなく、それゆえ悟性ないし思考の論理への相対性と思われるものは、経験の領域の制限を意味することがないからである。そしてパーズのみるところ、これはカント本来の見解に近い

考えでもある。なぜなら、経験的知識に関するカントの公式見解に従うならば、私たちは論理構造を逸脱した〈現象〉をそもそも世界のどこでも経験することはないからである。

しかしカントは、これとは別に《私は考える》を純粹かつ直接的な形で取り出しうることを疑わず、恰もそれを差し引いた世界を考え、それとの比較において「現象界の論理構造は、やはり《私は考える》のお陰でした」と宣言するようなどころがある。パースの考えでは、カントはここで少し遠くまで行き過ぎている。論理学にとっては、現象内部に張り詰めている普遍的な統合機能そのものがカテゴリーであると言えば十分であり、そこから更に進んで、カテゴリーの帰属先となる純粹能力をそのつど持ち出す必要はない⁷。たとえば物体の受ける加速度の働きを理解するためには、現象界における運動をよく観察しなければならないが、加速度の帰属先、あるいは究極の源泉を究明しなければならない訳ではない。

カントのアプローチとの違いを鮮明にしてみよう。いま「あの机は、黒い」「そのうえ、細長い」という二つの知覚情報から、「あの机は、黒くて、細長い」という命題が推論されたとする。「あの机は、黒い」というときは、「黒い」という述語が性質として「現前一般」へと組み込まれるが、命題構造の要素となるこのような述語は、「新しいカテゴリー表」の第3節で「形而上学的諸部分 (metaphysical parts)」（W 2: 49/CP 1.547 [1867]）と呼ばれるだけで、それが何に由来するか、あるいは特定の感性の形式に従って知覚されたものであるか、といったことをパースは全く問うことがない。同様に、「あの机は、黒くて、細長い」という連言化が果たして認識者の悟性の働きによって生じるものかを追求することもない。経験を観察し、事象一般を可能にする普遍的な〈働き〉を分析することはパースにとってもむろん重要であるが、その〈働き〉がある〈主体〉の特殊な〈純粹能力〉に帰されるか否かは、要するに異なる種類の問題なのである。デカルトに代表される大陸合理論、またカントからドイツ観念論へと至るドイツ哲学の伝統においても、自我の認識能力はつねに根幹の位置を占めると言わねばならないが、パースは「新しいカテゴリー表」の翌年の1868年には、むしろ人間の「四つの無能力 (Four Incapacities)」について論文を発表し⁸、推論によらない「直観 (intuition)」の働きを認めるデカルト主義と共に、

カント的な超越論的諸能力に対しても深刻な疑問を投げかけている (W 2: 193-194/CP 5.213-5.214 [1868]). 不完全な人間, 限られた能力の人間, さらに言えば自然的存在者としての人間という考え方は, R・エマソン (1803-1882) を含む古典アメリカ哲学に見られる一つの特徴でもあり, それが広い視点からみたパースの知的土壌を作っている, とみることもできよう⁹.

さらに論理学史の観点から, 「新しいカテゴリー表」におけるパースが, カントやヘーゲルより遥かに現代に近いところに立っていることを指摘することも有益である. 最も重要な点は, パースがこの時点で論理学の対象を「判断」から「命題」へと移行させていることである. 私たちは, 同一の命題的内容に対して, 違った心理的関わりをすることが出来るが, 現代の意味における「論理学」は, 形式的構造の安定性を確保した上で機能することを思い起こしたい. たとえば三段論法を行う過程で, 嬉しくても悲しくても, 推論内容や論理定項は同一性を保つ. したがって判断作用の多様な「主体」は問う必要はなく, 「誰が考えても同じ」ということが「命題」のレベルで帰結するようになる. 「新しいカテゴリー表」に「認識能力」の考察がみられないことはすでに触れたが, 「悟性」「判断力」等のいずれに関しても事情は同じである. それゆえ「純粹悟性のカテゴリー」といった特権的な範疇の帰属先は消滅し, パースの「カテゴリー」は事象のなかで直接的に機能する「普遍」と見做されることになる. 古くは「魂の能力」にまで及ぶ「認識能力」から, 論理形式としての「普遍」が切り離されることが現代論理学への重要な一歩であることは論をまたないが, 「判断」が問題にならない以上, 論理学におけるヘーゲルとの距離も明白となる.

ここまでの要点を振り返ってみよう. パースのカテゴリー論は, 思考の一般形式への関心を放棄するものではないが, 普遍的であるのはあくまでも事象の側の構造であり, 人間の特殊な認識能力に帰されるもの, あるいは個人の心の中にあると通常みなされがちなものとは決して根本的ではない, との考え方が一貫している. 前者はカントとの隔たりであり, 後者はいくぶんパースの気質を反映した考え方である. その上でパースは, 自分の哲学がカントやヘーゲルのそれと多くの仕方で連続または近接していることに敏感であった, といえる. 後年のパースによる次の一節は, 以上の考察を纏めるのに都合がよいので, 若干長い引用しておこう (CP 3. 422 [1892]).

カントが教えたのは、私たちの根本的な諸概念（our fundamental conceptions）が単にある論理形式の体系の不可避の観念（ineluctable ideas of a system of logical forms）であるということであり、これがまさにその通りであり、またそうでなければならないことを示すのに、何ら摩訶不思議な超越論主義（occult transcendentalism）は必要（requisite）ではない。自然（Nature）は、ただ理性的なものとして表れる（appears rational）限り、すなわち自然の諸過程が思考の諸過程のように見られる限りでのみ、理解可能（intelligible）なものとして表れる。そのことを論ずる紙幅はないので、私はこれをすでに示された事柄とせねばなるまい。すると帰結するのは、判明で相互に還元不能（distinct and irreducible）な三つの範型の形式（forms of rhemata）を私たちが見出すならば、これらについての観念（the ideas of these）が〔そのまま〕形而上学の三つの基本的概念（three elementary conceptions of metaphysics）である、ということである。諸カテゴリーに三つの基本的形式（three elementary forms of categories）があるというのが、ヘーゲルが同意するカントの結論であり、カントはこのことを〔アリストテレス以来の〕形式論理の分析（the analysis of formal logic）から確立しようとするのである。

ここで「形式論理」と言われているのは、カテゴリーの導出に先立ってカントの判断表が依拠したとされる伝統的アリストテレス論理学のことであり、関係論理を中心とする新たな論理学の導入によってパースが大きく前進させた領域である¹⁰。またカテゴリーの「三つの基本的形式」とは、カントのカテゴリーの四分類がそれぞれ三分枝する際の内的原理を指しており、それがヘーゲルの三分法に十分近いものであるとパースは考えている。III-2節で再論するが、大まかに言うと、第一のものは肯定的なもの、第二のものがその否定、そして第三のものが両者の総合、という原理である。また〈自然は、理性的なものとして表れる限り理解可能なものとして表れる〉との主張は、先にみた「新しいカテゴリー表」第15節の視点からすれば、さほど驚くには当たらないだろう。論理形式は、外からあてはめられるものではなく、事象を内部からおのずと形

成するものだからである。そして一般論理学に対する超越論的論理学固有の意義を強調したカントに対して、パースは〈超越論主義の哲学は本当に論理学に必要なか〉と最初の一文で問うているのである。上の引用は、パースが科学者としてのキャリアをほぼ終える時期にあたる 1892 年の発言であるが、その 5 年ほど前の 1887 年から、ペンシルバニア州の片田舎へ隠遁していたパースは、このあと後期の思索を次第に深めていくことになる。少し先へ進んで、1898 年前後のパースへ目を向けてみよう。

III-1. 「黒板の比喩」

古典的なプラグマティズムは、大胆な形而上学的思考を展開した、と冒頭で述べたが、なかでもパースの構想は独創的である。母校ハーバード大学のあるマサチューセッツ州で 1898 年に行われたケンブリッジ会議の連続講演において¹¹、パースは、宇宙進化論の哲学とでもいうべき着想を披瀝する。宇宙には、自然法則のように、きわめて規則的・反復的・一般的な事象もあれば、人間の歴史における個々の出来事のように、偶然的・非反復的な事象もある。そこで、現在の宇宙の在りように心を馳せるならば、法則的説明を逃れる偶然の事象の中から、次第に一般性・法則性が育ったとみるのが合理的である、という。そのことを説明するためにパースが使ったのが、本節のテーマである「黒板の比喩」であるが、この比喩の背景には「新しいカテゴリー表」から発展を遂げた後年のカテゴリー論がおかれているので、その点について最小限の前置きをした上で、実際のテキストを詳しく検討して行くことにしよう。

パースのカテゴリー論には、三つのカテゴリーしかない。「新しいカテゴリー表」において、それらは「質 (quality)」「関係 (relation)」「表象 (representation)」と言われ、それが約 20 年を経て「第一性 (Firstness)」「第二性 (Secondness)」「第三性 (Thirdness)」と呼ばれるようになる¹²。このような耳慣れない名称をパースが導入するのは、通常概念からの安易な類推により、カテゴリーが誤解されないためである。三つのカテゴリーの各々に配分される概念や性質を見ておくと下のようになっている。なお、老婆心ながら、「第一性」は、「潜在性」や「可能性」とイコールであるというより、「第一性」のあり方として「潜在性」や「可能性」を考えてみる、という方がパースの考え方に近い。

第一性 (Firstness) : 潜在性・可能性・即自性など

第二性 (Secondness) : 事実性・対他性・反作用性・外在性・非連続性・非合理性など

第三性 (Thirdness) : 一般性・連続性・合理性・法則性・習慣性など

さてパースは、「黒板の比喩」を使いながら、宇宙の原初の曖昧な潜在性から様々な質が相互に関係なく生じ、それらの一般化を通じて法則性が進化した、と主張する。そこで上のカテゴリーを念頭に、比喩全体に見通しをつけておくと、パースは、黒板を宇宙の始原の連続体（第三性）にたとえ、黒板に出現する白いチョークの線を即自的な質（第一性）とみたと、その上で、黒と白との境界線（第二性）へ注目することで、対他的な性格を獲得した白い線が、次第に一般性（第三性）を増大させて行く、と論ずる。実際のテキストの前半部をやや詳しく辿ってみることにしよう（RLT 261-262 [図1はパースのものではなく、説明のための補足である]）。

何も描かれていない黒板を、原初の曖昧な潜在性 (the original vague potentiality), あるいは少なくともその限定性の何らかの初期段階であるもののダイアグラムとしてみよう。[中略] この黒板の上へ、私がチョークの線を引く。この [白い線が描き込まれたという] 非連続性が、それによつてのみ、原初の曖昧さが確定性へむけて一步を踏みだし得たであろう、あの粗暴な作用の一つ (one of those brute acts [すなわち第二性]) である。

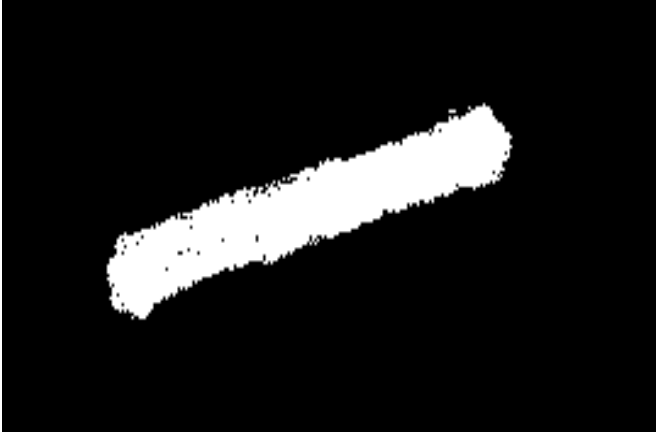


図 1

私が実際そこに描いたのは長円形の線 (oval line) である。なぜならこの白いチョークの印 (white chalk-mark) は「幅のない」線 (line) ではなく、ユークリッドの意味での平面図形 (plane figure) であり、それは一つの「連続的な」表面 (surface) なのである。「本当に」存在する唯一の線は、黒い表面と白い表面との間の極限 (limit) を形成する線だけである。それゆえ、黒板の上に「厳密な意味で」非連続性を生じさせることができるのは、黒板が分かたれてできた白と黒の二つの連続面のあいだの反作用 (reaction between two continuous surfaces) によってのみである。「これに対して線の内部の」白さは第一性であり、何か新しいものの現出 (springing up of something new) である「境界に接するときの白のように、黒とのコントラストを含意しているわけではない」。

しかし、黒と白との境界 (boundary) は、黒でもなく、白でもなく、両方でもなく、どちらでもないものでもない。それは二つの色が組になっていること (pairedness of the two) である。この事態は、白にとっては黒の能動的な第二性 (active Secondness) であり、黒にとっては白の能動的な第二性である。

以下、少し後に出てくるパースの説明へ飛んで、論旨をたどりやすくしてみよう (RLT 262).

白さや黒さ、つまり第一性は、その本質において連続性に関しては無関心 (indifferent) である。第一性は、難なく一般化に身を任せてしまう (*lends itself readily to generalization*) が、それ自身においては一般的でない (*not in itself general*)。白さと黒さとの間の境界は、本質的に非連続あるいは反一般的 (*antigeneral*) である。それは執拗なまでに〈これ・ここ (*this here*)〉である。原初の潜勢態は、本質的に連続的あるいは一般的である。

パースが着目する境界線の問題は、後でも重要になるが、このような考察は唐突に思いつかれたものではない。「新しいカテゴリー表」から遡ること2年、弱冠25歳のパースは次のように論じ、かつその文脈ではヘーゲルにも言及していることに注意を払う必要がある (W 1: 204 [1865])。

ここに1枚の紙があり、その[表層の]一部分が赤く、残りの部分は青いとしよう。[紙の表面は、いずれかの色に塗られているのであるから]すべての点が、赤もしくは青でなければならない。二つの色の境界は、線を形づくる (*forms a line*) が、その[境界]線は赤であろうか、青であろうか。[中略]正しい答え (*proper answer*) は、それゆえ、境界は赤と青の両方であって、ただし境界点においては、二つの色の区別 (*the distinction between them*) が消滅しつつある (*vanishing*)、と私には思われる。そしてこれがヘーゲルによって与えられた回答であり、また同様の問題に対して数学者が与える回答である。

数学者の回答への言及からも分かるように、ここでのパースの考察はおかしなものではない。標準的な位相幾何学(点集合トポロジー)にならって、「境界 (*boundary*)」を「境界点 (*boundary points*) の集合」とし、〈その任意の点の近傍が内点 (*interior point*) と外点 (*exterior point*) とを共に含むような点の集合〉として「境界」を定義すれば、パースの「境界線」のイメージに十分近く、す

ると赤い面と青い面とに含まれる点列が、両側から収束する極限点の集合が「境界」をなしていることになる。そこで「黒板の比喻」で、パースが白と黒との境界を説明するのに、「組になっていること (pairedness)」と述べていたことを、ヘーゲルに引き寄せて考えてみると、「組になっていること (pairedness)」とは、要するに集合の内部からみた〈対他性〉の表現と言って差し支えない。このような議論は、少し難しく聞こえるかも知れないが、ヘーゲルとの関連において、次節でより詳しく検討するので、まずは「黒板の比喻」の後半にも目を通しておくことにしよう。

以上では、諸宇宙の起源ともいべき始原の連続体が「第三性」、宇宙に質的な真新しさを湧出させる即自的潜在性が「第一性」、質の湧出がもたらす質的な対他性および出来事としての外在性が「第二性」とされたが、ここから、出来事の反復を通して一般性が増大して行く、という考察へと移って行く。パースは、図を用いながら次のように説明する¹³。

しかし、かかる印 [白いチョークの線] は単なる偶然 (a mere accident) に過ぎず、したがって消去されてしまうこともできる。この印は、全く異なる仕方で描かれた別の印と干渉することはない [複数の線は相互に独立でありうる]。両者の間に整合性が成り立つ必要はない。この印が短時間であれ存続するのでない限り、つまり何らかの習慣の端緒 (some beginning of a habit) が確立されるまでは、それ以上の進歩は生じえず、後者の条件が満たされることにより、かの偶然的な出来事は、何らかの萌芽的・存続的な質を獲得し、それが整合性への傾向ということになる。この習慣は、一般化しようとする傾向であり、したがって一般化であり、それゆえ一般者 (a general) であり、かくして連続体あるいは連続性である。それ [獲得された習慣] は、その始原を、潜在性に内在する原初的な連続性 (the original continuity which is inherent in potentiality) にもっていなければならない。一般性としてみられた連続性は、潜在性に内在しているが、それは本質的に一般的なのである。

描かれたあと線がひとたび少し持続すると、別の線をそのすぐ側に描くことができる。忽ち私たちの眼は、それらの線の覆いのようなひとつの新

しい線 (a new line, the envelope of those others) があることを、私たちに確信させる。このことは、一般化する傾向が偶然的な出来事から (from chance occurrences) 新しい習慣を形成するという論理的な過程をかなりよく表している。

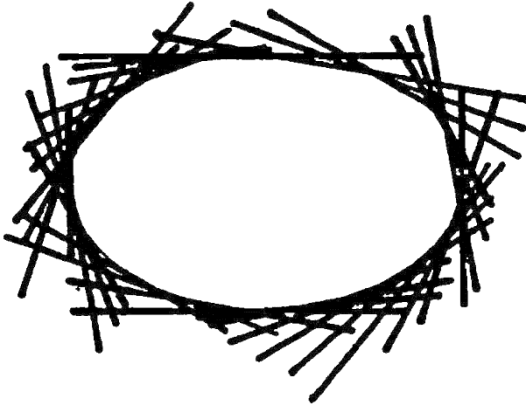


図 2

私たちは、この過程を事物のなかに現に生じるものと想定することができる。新しい曲線は、その明瞭な性格においては新しいのであるが、その連続性は黒板そのものから得ている〔実際、曲線の方は完全に滑らかにはならない〕。原初的な潜在性は、そこから宇宙が形成されるアリストテレス的質料ないし不確定性 (Aristotelian matter or indeterminacy) である。長円形への接線であろうとする習慣 (the habit of being tangent to the envelope) のもとで増殖する直線は、徐々に自らの個性 (individuality) を消失してゆく傾向を示す。

比喩後半の中心におかれているのは、〈一本の白い線にも方向があるのだから、その方向のなかに、一般化の傾向を読み取ることができる〉という発想である。つまり、一定の緩やかな傾向性を示す出来事が反復的に生起することで、宇宙

に規則性・法則性（第三性）が蓄積されていく，という考え方である．かかる考察は，数学者・科学者でもあったパースにとっては，ごく自然な発想に基づいているといってよい．まずパースが言及する「接線」に着目すると，高等学校等で教わるように，「接線」は曲線の局所的な性質を表わす．それゆえ，ある曲線の基本的な性質を調べるには，関数曲線へ引かれる接線の傾きを方々で調べればよい（図3）．

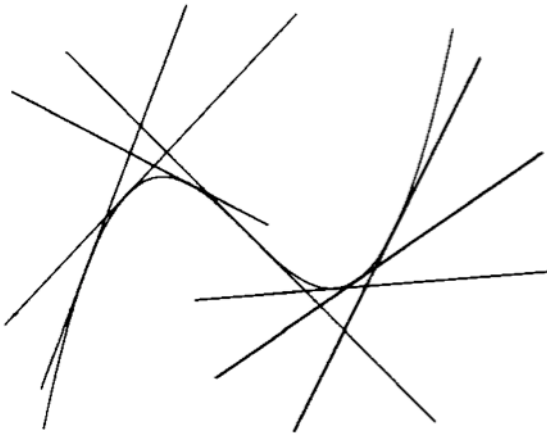


図3

けれども一定の局所的傾向性（傾き）の一般化されたものが，もとの関数曲線である，という見方もできるだろう．つまり最初に曲線を描いてそれから接線を考えるのとは逆に，一定の性質を満たす接線を至る所で描けば，それらがむしるもとの滑らかな曲線を構成するはずだ，と考えるのである．もっとも簡単な例を挙げると，放物線 $y = x^2$ の接線の傾きは（微分して） $y = 2x$ であるから， x 座標に応じて傾きが $2x$ となる接線を描きこんで行けば，もとの放物線が姿をみせることになる（図4）．私たちは直線しか描いていないのであるが，いったん背後の放物線に目が引き寄せられると，接線はいわば互いに溶け合っており，有限な直線の数ではもはや意識に上らなくなる．このように与えられた傾き

から微分前の関数を発見することは、易しい微分方程式を解くことに相当する。

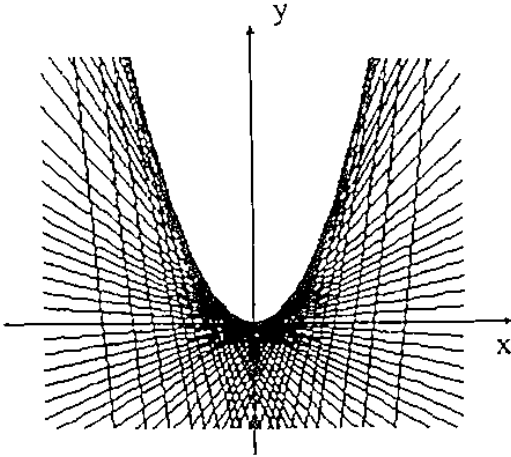


図 4

さらに一般的に考えて、世界には傾向性という〈見えざる潜在的な流れ〉が渦巻いており、それらのうち一定のものだけが現実化する、といった見方をすることもできよう。潜在的な傾向性が宇宙の隅々に浸透しているというイメージを、矢印の埋め込まれたベクトル場であらわすと(図5)、ある定義域において傾きを満たす曲線を見つけることは、やはり微分方程式を解いて方程式(あるいはそのグラフ)を発見することに相当する。図6において複数のグラフが見られるように、与えられた区間上の微分方程式の解は、存在するとしても一意的に定まっているとは限らないから、一般的な傾向性は、初期条件などの偶然性に身を委ねている、と解釈することができよう。

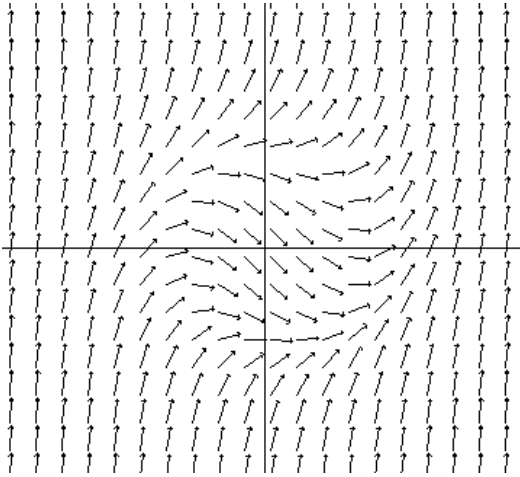


図 5

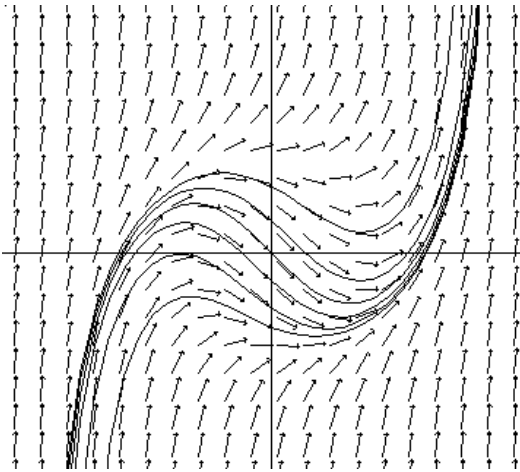


図 6

このような数学的背景に少し注意を払う方がよいのは、パースがヘーゲルを時に高く評価をしながらも、数理科学に対するヘーゲルの理解は不十分であつ

たとみる点では、一貫していたからである。曰く、「神学生ヘーゲルは、この宇宙が至る所で連続的な成長に充ちている (permeated with continuous growth) ことを発見したが〔中略〕、それは、微分方程式が実用に供されるようになって一世紀半も後になって、完全に新しいアイデアとされたのであった」(CP 1.40 [c.1892]) と、パースはケンブリッジ会議の6年前に述べているし、同様の視点はそれ以前から見られる。次の引用は、哲学的資質と余りに不均衡なヘーゲルの数学的素養の欠落をパースが嘆くかのようなものである (W 6:179-180 [1887-1888]).

〔ヘーゲルが〕 幾つかの事情に気づきさえしていたならば、彼は自分で自らの体系を革新する (revolutionize) ことへ導かれたであろうと想像する。その一つに、三項態の第二の観念 (the second idea of the triad) の二重分割または二分 (the double division or dichotomy) が挙げられる。ヘーゲルは外的な第二性 (external Secondness) を常々すっかり見落としている。〔中略〕さらに、不幸にもヘーゲルは数学において稀なほど不見識であった。〔中略〕彼は、それを知ることが自分に最も甚大な帰結を齎したに違いないことを残念ながら知らなかった。それは、解析学者が以上のような著しい欠陥を殆ど回避してきたということ、また微分法の方法とアイデアを徹底的に追求することがその欠陥を確かに根こそぎ克服してしまうことである。ヘーゲルの弁証法は、微積分学の諸原理の形而上学への初歩的かつ虚弱な適用 (a feeble and rudimentary application) でしかない。

引用の中間部分で言及される「外的な第二性」の欠落は、後述するように、パースがヘーゲル最大の弱点とみなすものであるが、それにも関わらずヘーゲル哲学についてパースが一定の理解と共感を示した点は、観察の細かさや読解の柔軟さのなせるわざである。たとえば、上で「三項態の第二の観念の二重分割」という考えをパースが肯定的に評価している様子が窺えるが、そこからヘーゲル『大論理学』の「絶対的理念」章における考察、なかんずく二重否定による弁証法の四分法を想起するのは自然であろう。ヘーゲルが『哲学史』中のカントの項でも述べているように、そもそも「三分法 (Triplizität)」はカント哲学の「功績」であるが、その一方で、統一の間である〈第二段階〉が〈否定

の否定) という形で二重に数えられること、したがって否定性には二種類あることをヘーゲルは認めている、とも言えるからである¹⁴。しかしパースから見ると、その二種類の否定性のいずれもが十分に強い否定性、すなわち「外的な第二性」になっておらず、次節で説明するように、このことが、最終的には両者の袂を分かつことになる。なお、上の引用の最後の部分で、パースがヘーゲルの数学の素養不足を嘆いているのは、致し方がないというべきである。数学は、日進月歩する学問であり、現場の数学者・科学者としても活躍したパースからみて、ヘーゲルの数学理解が十分でなかったのはむしろ当然のことであり、批判をしてもさして意味はない¹⁵。

III-2. 「黒板の比喩」とパースのヘーゲル解釈

それでは、パースはヘーゲル哲学のなかに、どのような強みや利点を見い出しているのだろうか。このことを考えるために、「黒板の比喩」の前半部に戻ってみよう。ケンブリッジ会議へ向けてパースが準備した関連草稿は多いが、その中には、実際の講演では省略された論点を書き残されているなど、参考になるものが少なくない。図7はそのような手稿の一葉を示したもので、「黒板の比喩」において、なぜ白いチョークの線に〈幅〉があることが重要であったか、またなぜ白と黒との〈境界〉にパースが重きを置いたかを、さらによく知ることが出来るものになっている (MS 942: 1 [1898])。

A^s region or rather that very same quality. It now passes ¹⁰
 away from the maximum and of course diminishes.
 And this diminution will continue till a zero is reached.
 We are thus forced by this kind of reasoning and
 reasoning about the subject to conclude that the continuum
 of possible quality consists of two regions which are just
 alike (non-metrically of course, for measurement is
 as yet undeveloped) are just alike, I say, except that one
 one is ^{the former} reversed or as the mathematicians say, inverted
 like a looking-glass image. But these two regions thus
 mirroring one another are in their infinite maxims
 identical. Now what is the significance of this?
 Every quality in itself is absolutely severed from every other.
 It has no relations, no parts, no degrees of intensity. It is
 nothing but what it is for itself; and it cannot be represented
 or expressed in anything else as it is for itself.
 But equality generalized, as it is in the continuum of
 quality, is essentially represented. Without being repre-
 sented in something else, it cannot be what it is.
 There is that essential feature of duality in it. The quality,
 that feels or trips of consciousness, which seems, and the
 quite-consciousness which feels that quality, are not two,
 because the quality, being generalized, and continuity in
 consciousness is generalizable, is capable of entering different
 consciousnesses. Indeed, though it is distinguishable from
 consciousness by this very plurality, yet it cannot exist
 in its generalized state without the possibility of being felt.
 Quality in general in its infinite degree is as a point of direc-
 tion. It is that feeling of being in itself. It is in itself as it is itself.
 It is nothing but what it is for itself. It is just that quality in itself
 which is entirely in itself given this quality in the feeling of it and in the feeling.

図 7

パースの考察のポイントを要約し、ヘーゲル的な言葉遣いで表現すると、チョークの白い線の内部が連続性を持つだけでなく、「(即自的な白と、黒板と接する部分における対他的な白とが、同じ白としての統一のもとにある)」という性質を、白という質自身が持っている」というのが中心的な論点である。手稿の中央の段落あたりからパースの言葉を追ってみると、次のように言われている。

あらゆる質〔第一性〕は、それ自体においては (in itself) 他のあらゆる質から絶対的に切り離されて (absolutely severed) いる。それは、関係・部分・強度の度合いを少しも持たない。それは、それ自身にとってそうある、という以外の何ものでもなく (nothing but what it is for itself), それが自らに對してあるような仕方、他の何かにおいて表現されたり (expressed), 表

象されたり (represented) することはできない。しかし、連続体における質 [たとえば黒板上に引かれた白い線のもつ白さ] のように、一般化された質 (generalized quality) は、本質的に表象されたものである。他の何かにおいて表象されることなくしては、当の質であることはできない。そこには二重性 (duality) というあの本質的な特徴があって、質は今や二つになっている。即ち、かくあるようだという意識の色合い (tinge of consciousness, which seems) と、その〔潜在的な〕質を感じる〔より明瞭な〕質意識 (the quale consciousness, which feels that quality) とである。というのも、その質は今や一般化されているのであり、また〔第三性である〕連続性は、私たちがすでに心に留めておいたように、〔同じく第三性の〕一般性であるから、その質は異なった意識の中へ入っていくことができる (can enter different consciousnesses) のである。

一見して明らかなように、ここでもパースは即自的な質という「第一性」から「二重性 (duality)」へと考察を進めている。そこで、「質は今や二つになっている」というパースの論点を、さきの「黒板の比喻」の中で解釈してやると、黒板と白いチョークの線の比喻を使いつつ、実はパースが「即自性」(第一性)と「対他性」(第二性)の「統一」ないし「一般化」(第三性)のやさしい例を考察していたことに気付く。むしろヘーゲル自身の説明は、もう少し込み入っているのであるが、必要最小限の論旨を追うだけなら、図8のように考えればよいだろう。

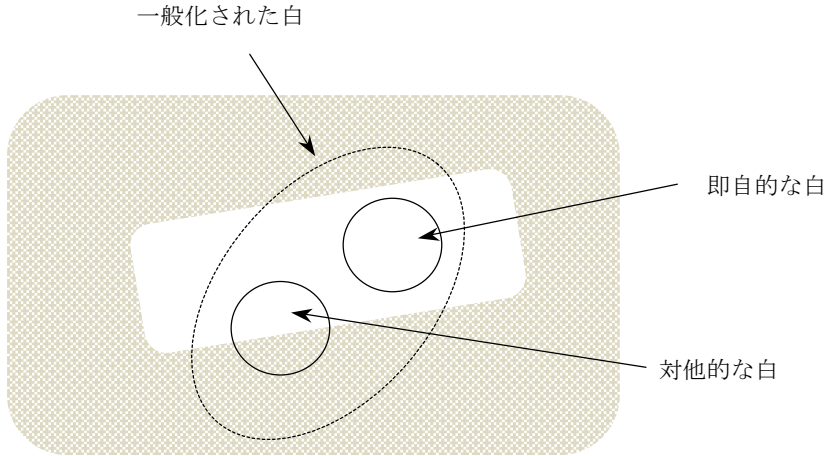


図 8

論理的には〈白しかない世界〉もありうるように、白は自己完結した即自的な性質の側面をもつ。チョークの純然たる白の部分がそれにあたる。だがいったん白い線が描かれるならば、それは黒板の上で連続的な拡がりを楽しみ、黒と接する縁においては「対他的な白」となり、そこに反作用としての「第二性」がはたらく。これは、即自的な白にとっては予期せぬ経験である。なぜなら、背景の黒板の色がたまたま自分と同じ色でなかったのは、白にとっては偶然と言うほかないからである。他方、一息に描かれた白い線は、線の内部の「白」も、線の縁で黒と接する「白」も同じ「白」であるから、二つに分裂した「白」が他ならぬ「白」自身によってすでに統一されている。パースが上で言及する「異なった意識の中へ入っていくことができる」という時の「白」は、かかる仕方ですべて即自性と対他性とに分裂してしまった自己を(即かつ対自)として回復し、今や一般性を獲得した白となっている。はじめ「白」は「黒」という他者を見て驚いたけれども、考えてみれば、その驚いた自分は驚く前の自分と同じであった、と反省されてきて、より鮮明な〈即かつ対自〉の自覚を持つようになった白は、以前ほど驚かないという一般性を身につけた、といった具合である。

こういったことは、白と黒という色同士に限られる必要はない。チョークに

も様々な色があるから、線を生み出したチョークがたまたま白かった事に究極的な説明はなく、黒板にしてみても、外部から突然に線が描き込まれることなど、そもそも黒板の知ったことではない。このような外部からの強引かつ突発的な侵入が、色同士のような質的な対他性と比べていっそう際立った「他性 (otherness)」を表現するなら、パースのいう「第二性」は、まさに合理的なものへ回収することが不可能な要素として考えられている。そして、そのような粗暴な到来としての「外的な第二性」という要素が、ヘーゲル哲学に最も欠落しているものである、とパースは言う。「諸君が望むなら、[ヘーゲルがそうしたように] 世界が純粋なる理性の展開だと仮定するがよい。だが、万物が如何にして理性の純粋なる蒸留物であるかを思索しながら、通りを歩いている最中に、重い棒を担いでいた人が諸君の腰の辺りへ一突きを与えたなら、世界のなかには純粋なる理性が説明し損ねる何か [第二性] があると諸君は考えるだろう」(EP 2: 177 [この略号については、注 11 をみよ] /CP 5.911 [1903])。突然やってくるチョークの一撃は、黒板や白いチョークをいくら分析しても出てくようなものではない、というほかない。

ヘーゲルの考え方を推し進めると、しかしながら、そのような説明不能な突発的な出来事さえ、先立つ弁証法的過程によって産出されたものでなければならぬだろう。すべては歴史のなかを動いているし、黒板へ向かってチョークを動かした手だってある筈ではないか、と言われるかもしれない。けれども歴史のなかで運動することは、一回限りのもの、法則性を欠いたもの、何の説明もつかないものを、論理的に排除するわけではない。たとえば黒板に一本の白い線が現われたとき、次もあるのか、これきりなのか、しばらくすると白い直線とは異なる形が現われはしないかといったことを、確実に演繹することはできない。それでも、推論が可能でなければならない、と言うなら、それは論理が硬直してしまっている、とパースはみる。この点をヘーゲルと関連づけながら考察すると、およそ次のようなことになる (MS 940:10/CP 6.217[1898])。

ヘーゲルが述べるところでは、いやしくも哲学に意味があるならば、全宇宙とそのあらゆる特徴は、いかに微細であれ合理的 (rational) なのであり、出来事の論理によって、現にあるがままであるべく強いられたのであり、

宇宙には理性 (reason) 以外の作用の原理 (principle of action) はない。しかしこのような思考の筋道は、始まりは正しいが、厳密ではない (not exact) と私は答えたい。そこでは論理的な過ち (logical slip) が犯されている。[中略] 全宇宙とそのあらゆる特徴が、出来事の論理によってもたらされた (brought about by the logic of events) という意味で、合理的と見做されなければならない、というのは正しい [〈宇宙は何らかの論理に従っている〉という考えには賛成できる]。けれども、宇宙が出来事の論理によってかくあるべく制約されている (constrained) ということにはならない。進化と生命の論理 (the logic of evolution and of life) は、与えられた一つの結論を絶対的に強制する [演繹論理のような] 硬直した種類のものである、と考える必要はないからである。その論理 [真の出来事の論理] は、[むしろ] 帰納的あるいは仮説的な推理の論理であるかもしれない。

ヘーゲルの思考の筋道について、「始まりは正しい」とパースが述べている点に注意されたい。宇宙に何らかの論理が働いている、という点でパースはヘーゲルに同意する。だが、弁証法だけを〈真正の論理〉と考えたのは、いかにもヘーゲルの勇み足で、これまで研究されて来なかったものも含め、様々な「論理」があることを看過したために、ヘーゲルは、世界が偶然の一撃に見舞われながら帰納的・仮説的に進行する可能性に、ついに思い至らなかった、ということになる。

このような考察は、翻ってパースの形而上学の繊細な性格とも結びついており、それがアメリカ哲学の伝統にも緩やかに組み込まれていく。以上の議論ですでに半ば以上露わになっているように、パースの考えでは、質的多様は「質」の働きそのものによって「統一」を得るのであって、それ以外の「統一」作用は、最終的には、すべてこの微弱な質的統一に帰着する。「白」は、自己統一するのであって、私たちが統一するのではない。カント的な統覚やヘーゲル的な統一があるとしても、それらを根拠づけるような特権的な主観性を仮定するのは、行き過ぎであり、むしろジェイムズのところでも少し触れたような自律的综合が、質的多様の相互浸透を可能にして入ればよい、と考える。再びケンブリッジ会議の準備草稿から、パースの簡約な発言をひとつ拾っておこう (MS

948:2/CP 6.225 [1898]).

クオリア (qualia [感覚質]) に何らかの共通するものがある、と言い得るならば、その全てに帰属するのは統一性 (unity) である。そして、カントが心 (mind) の異なる働きに帰す種々の総合的統一、論理的整合性という統一、種における統一、そしてまた個体的対象の統一、これらすべての統一 (all these unities) は、知性の作用 (operations of the intellect) から生じるのではなく、知性が働きかける質-意識 (quale-consciousness upon which the intellect operates) から生じるのである。

このような見解は、ドイツ観念論のような自我論を中心として構築される哲学から離反して行くだけでなく、伝統哲学における「第一性質 (primary qualities)」の偏重に対する挑戦にもつながる。「客観的」とされる「延長」や「運動」といった「第一性質」に比べ、「色」や「匂い」といった「第二性質 (secondary qualities)」は、単に「主観的」と見られがちであるが、それらは自然の諸過程のなかで「心」や「意識」が生起することを促しているのもであって、「第一性質」と異なる種類の重要性が認められなければならないものである。パースのように考えるならば、世界にみられる統一性・一般性・普遍性などは、すべて背後で働く質的統一性と呼応して進化してきた心が諸性質と共に生み出した連続性の諸形式である、ということになるだろう。

本節を締め括るにあたり、パースだけがクオリアのごとき感覚質に積極的な役割を認めようとしたのではないことに触れておこう。二十世紀自然哲学の巨匠ともいべき A・N・ホワイトヘッドは、「白さ」「甘さ」といった単純な質を「永遠的客体 (eternal object)」と呼び、それらは自然の諸過程を離れて実在するものではないが、パースの「第一性」のように、他の質からは独立の個別的本質を持つという。ホワイトヘッドの言葉によれば、「各々の永遠的客体は、それぞれの特有の仕方において、それ自身がそれであるところの個別的なものである。この特殊な個別性 (particular individuality) は、その永遠的客体の個別的本質 (individual essence) であり、それ自身であるという以外に、記述されることはできない」¹⁶。しかしそれだけではない。センス・データには、第二の

側面として「複雑な、関係づける役割 (complex relational rôle)」があり、色の場合であれば、色そのものが自然の過程において「客体化」の機能をもつという。ホワイトヘッド曰く、「たとえば現在〔の経験野〕における椅子を、〔眼で〕見ているとする〔中略〕。〔椅子が帯びる様々な〕色は、主体の経験に含まれている要素であるが、それらは、一つの仕方では椅子を客体化するのであり (objectify the chair)、それとは別の仕方では、目を客体化する (objectify the eyes) のである」¹⁷。「色」は単に「知覚の結果」であるだけでなく、知覚者と知覚対象とが共に客体化されることを促す紐帯であることになる。なおホワイトヘッドは、このような第二の側面にかんがみて、「永遠的客体」には「個別的本質」だけでなく「関係的本質 (relational essence)」がある、としている。

哲学の改造を唱え、パースやホワイトヘッドよりも遙かに広く読まれている J・デューイはどうであろうか。デューイの著作にも、以上のような古典アメリカ哲学の伝統を受け継ぐテキストを見出すことができる。たとえば『経験と自然』のなかで、デューイは、知覚に上る「客体」が即自的な「質」を持つことにおよそ異議を唱えてはいない。

それら〔客体〕は、直接的で終局的な質 (immediate and terminal quality) を持っていることもあるし、持っていないこともある。そのような質は、絶対的であり比較におけるそれではない (quality as such is absolute not comparative)。ある事物は、欲せられ求められている質と比較して、ある濃淡をもった青さ (shade of blue) を帯びているかも知れないが、その青は、それ自体においては (in itself [つまり即自的には])、青さの度合いを持たず、また青そのもの (blueness) よりいっそう青かったり、青くなかったりするわけではなく、したがって、終局的で没入的な質 (terminal and absorbing) を伴っている¹⁸。

パース、ホワイトヘッド、デューイがこのような質の考察を決して軽視しないのは、とくに審美的な経験においてそれらが重要性を持つからであり、たとえば美術品に魅せられた心がありありと目撃する妖艶な色彩や形を想像すれば、デューイが「終局的で没入的な質」と言っているのも頷けるのではなからうか。

やや大げさに言うと、デューイの「直接的な質」は、パースの「第一性」やホワイトヘッドの「永遠的客体」と同様、私たちの心と対象の質とを沈黙のなかで統一してしまう機能をもつ。これに対して、下の引用に見られるようなデューイの「二重性」への視点は、パースの「第二性」やヘーゲルにおける「否定」の契機と比較してみると興味深いものである。

生命の連続的な進行において、対象はその終局的性格 (final character) のある部分を手放し、後続の経験の条件となる。[中略] 換言すれば、全ての経験された対象は二重の地位 (double status) をもっている。それらは、[美的経験におけるような] 享楽という仕方においてであれ [その反対の] 苦悩の仕方においてであれ、個別化されており、自己完結的 (consummatory) である。それら [経験された対象] はまた相互作用と変化の連続のなかに含まれ、そのために、後にくる経験の原因となり、潜在的な手段となる。この二重の力能 (dual capacity) のゆえに、経験された対象は問題的 (problematic) になる。[中略] そこには、分断された反応 (divided response) があるのである¹⁹。

デューイの捉えかたの特徴は、パースのカテゴリー論の言葉でいうと、「第一性」と「第二性」とを接合し、それを対象の「終局的な性格」とした上で、連続性である「第三性」との間に、〈二重性〉の緊張を持ち込むことである。デューイのなかでも、「質」は「第一性」的な自己表出の側面があるが、1920年代以降のデューイは、質がむしろ〈己を閉ざす〉ことで「第二性」すなわち「非連続性」を獲得するという見方をとり、それが「連続性」という「第三性」と対立することになる。分かりやすく説明することは難しいが、こう言うてはどうか。パースの「第一性」は、観察者に対して〈中立的な無関心者〉であって、「白」はこちらを振り向かないが、こちらを拒絶することもない。これに対して、デューイの「直接的な質」は、見れば見るほど観察者から己を遠ざけて行き、それがいかにも個性的な「青」を冴えわたらせる。関係を絶つことで、「青」は唯一性を愉しみ、かと思うと、忽ち対象の特徴の一部であったことを告げて、関係の連続性・相互作用のなかへ還って行くのである。かくして

知覚対象は、黙秘しつつ語るが、その拒絶的・没入的な沈黙と不断に再開される雄弁とが、対象の「二重の力能」となっているといえ、それほど外れてはいない。

IV. むすび

最後に、パースがカントやヘーゲルを通じて考察した問題群の多くは、現代の哲学においても色々形を変えて現れていることを指摘しておこう。以上のような考察を、現代の議論へと結びつける手掛かりとして、初期ウィトゲンシュタインと現代の分析哲学者M・タイ（1950-）の考察を簡単ながら俎上に載せることができる。先立つ節では、質的多様は「質」の働きそのものによって「統一」を得ること、したがって、カント的な統覚やヘーゲル的な統一を特権的な自我や主観性と共に持ち込む必要はないということ、そしてジェイムズ、ホワイトヘッド、デューイといったアメリカ哲学の思想家たちに類似の主張が認められることを説明した。デューイの「青」からは、『論理哲学論考』の4.123節を想起された方もあるのではないかと思う。

この青色とあの青色とは、その本性からして (eo ipso) 一方が他方より明るい青であるとか、暗い青である、という内的関係に立っている。[同一の青のヴァリエーションである] これら二つの対象が、このような関係に立っていない、と考えることは不可能 (undenkbar) である²⁰。

「この青色」と「あの青色」という二つの視覚印象と、それらの共通性質としての「青」との齟齬ないし対照性を、デューイの「二重性」に見立てると、ウィトゲンシュタインの考察する共通性質としての「青」は、論理的浸透性とでもいべきものをもっている。チョークが飛んできて顔に当たった、といった偶発的な事象間の関係を「外的関係」とすると、濃淡を違える二つの青は、ウィトゲンシュタインにとっては広義の論理的关系である「内的関係」におかれる。それが、二つの青を必然的に結びつける。〈これらの青には、違いがある〉と私たちが有意味に語りうるのは、まさに両者が青であることを理解した上でのこ

とであり、〈これらの青は、互いにまったく似ていないほど、完全に異なっている〉と語ることは意味をなさない。このような内的な結びつきは、パースがまさに「新しいカテゴリー表」において指摘したことの一つでもあった。パースは次のように回想している (MS 787:29/CP 1.566 [c.1899])。

私は、1867年、「新しいカテゴリー表」において]二項的關係 (dual relations) は、關係項とその相關項〔被關係項といつてもよい〕とが〔純然たる青のような〕非關係的特質 (non-relative characters) 〔即自的な質・自体的な特質〕の共有が存するか否かによって、二種類 (two kinds) ある、と述べた〔パースは、「新しいカテゴリー表」の § 14 でこれを論じている〕。このことは、正しい。〔まず共有が存する場合に関していえば〕二つの青い対象は、事實自体によって (ipso facto), 相互關係に置かれている。〔他方、共有が存しない場合は〕徴表が類似していない限り、このことは真でない、と指摘しておくことは重要である。かくしてオレンジと正義 (an orange and justice) とは、その特質の異質性 (disparateness of their characters) のゆえに、そのような關係には置かれぬのである。

念のために強調しておく、二つの青い対象は、私たちが判断を下すから結びつけられるのではなく、「青」そのものにより、事實の次元において、相互關係におかれている。私たちが気づかなくともおのずと關係し合っているのである。これに反して、オレンジと正義の場合は、私たちが結び付けることはあっても、おのずと結びついている、というわけではない。ホワイトヘッドを敷衍するならば、色のような「質」は、人類が存在しようがしまいが事物を關係づける働きを發揮する、ということになるだろう。

このような事物の「質」に関する考察は、言うまでもなく形而上学的なものであり、現代の分析哲学とは相容れないと思われるかも知れないが、そんなことはない。心の哲学に関する著作でよく知られるテキサス大学オースティン校のM・タイの考察は、そのよい例の一つであろう。タイは、周辺事物との比較において知覚された關係的な《色》と、そのような比較を欠いた非關係的な《色》との知覚が結びつくことで、通常の知覚が成り立つ、と論ずる。以下の引用で

考察されているのは「黒」の知覚の場合であるが、ここで提案されているのは、非関係的な〈黒〉と関係的な《黒》との重ね合わせによる知覚の説明である。

日常生活において、私たちは〔全く何も見えないような〕真っ暗な部屋について、「ここは、ピッチ[タールに似た黒い樹脂]のように漆黒だ(It's pitch black in here)」と確かに言ったりする。そこで、〈黒い(black)〉と《黒い(BLACK)》とを区別しよう。今いったような暗い部屋で人が経験するのは〔端的な黒という意味での〕〈黒い〉であり、〔もう一つの言い方で〕《黒い》ではない。〔そこで〕あるものが《黒い》というのは、〈黒い〉ことに加えて、周辺事物よりも暗い場合だけであるとしよう。したがって《黒い》は、〔その部分だけに注目すれば〕純粹なるコントラスト色(a pure contrast color)であるが、〈黒い〉の方は〔端的に黒いのみだから〕そうではない。

この提案によれば、《黒い》は、複合的かつ部分的に関係的な性質(a compound, partly relational property)である。事物の〔この意味での〕《黒さ(BLACKNESS)》は、人が間接的に(indirectly)見るのであり、それは〔非関係的な〕〈黒さ(blackness)〉と、周辺事物に対する相対的な暗さ(relative darkness)とを見ることによって、見るのである。だが〈黒い〉は、関係的ではなく(black is not relational)、あるいは、少なくとも関係的であると想定するための説得的理由はいまだ与えられていない²¹。

ここから分かるように、タイは、周辺事物との関わりの中で黒いものが見られるとき、非関係的かつ直接的な〈黒さ〉の知覚と、たとえば相対的な暗さという関係的な《黒さ》の知覚とが統合されて、ある種の合成的な《黒さ》が間接的に知覚される、と説明する。視覚における残像効果なども考えに入れると、関係的な《黒さ》こそ、私たちが通常の環境下で経験している色のあり方であると言ってもよいくらいであるが、非関係的かつ直接的な〈黒さ〉の知覚が、排除されていない点に注意されたい。〈黒さ〉を残すことには、哲学的な動機がある。錯覚や幻視を、周辺条件に起因する関係的な知覚が正常でない仕方でも成立したもの、とみなすならば、関係的な《黒さ》だけでは正常な意味での「黒」の知覚の説明が不安定になるし、私たちが「黒」という概念を持つことの説明

も難しくなる。とくに後者の点を強調するならば、即自的な〈黒さ〉は「黒」の内包面である、といった見方をすることも出来よう。だが、通常の知覚において、私たちは確かに〈黒さ〉を見ているのであろうか。さらに、〈黒さ〉と《黒さ》という二つの黒は、いかにして同一者としての「黒」に関わるのであろうか。それらは、ウィトゲンシュタインの考えるように、内的に関係し合っているのであろうか。パースの考察も大いに参考にしながら、皆さんにもぜひ考えてみて頂きたい。

註

1. Charles S. Peirce, *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Edition*, Bloomington: Indiana University Press, 1982f. を本稿では W と略した上で、出典箇所を巻数と頁数とをコンドンで区切って表示する。旧来の普及版著作集 *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Cambridge MA: Harvard University Press, 1931-58 は、誤植や編集上の問題が多く、左記のW版が利用可能な際は、そちらを使用することが学術的に推奨されているが、この旧版に対応するテキストがある場合は、慣例に従って CP を略号として用い、当該テキストの含まれる巻数とパラグラフ番号を / で区切って併記する。またわかる範囲での執筆年代を [] 内に示す。したがって「W 2: 49-59/CP 1. 545-559 [1867]」は、「W 版, 第 2 巻, 49-59 頁/CP 版, 第 1 巻, パラグラフ 545-559, 執筆は 1867 年」を意味する。
2. Peirce, C. S., *The Charles S. Peirce Papers*, Cambridge MA: Harvard University Library Microreproduction Services (1963) に収録されている草稿を MS (書簡以外の手稿) および MS L (書簡の手稿) と略し、慣例に従ってロビン・カタログによる草稿番号と欄外頁数を挙げる。たとえば「MS 787: 33/CP 2. 340 [c. 1899]」は「マイクロフィルム版, ロビン・カタログ番号 787 の手稿, 欄外頁数 33/CP 版, 第 2 巻, パラグラフ 340, 執筆は約 1899 年」の意である。なおロビン・カタログとは、Richard Robin, *Annotated Catalogue of the Papers of Charles S. Peirce*, Amherst: The University of Massachusetts Press, 1967 のことであり、検索すればすぐオンライン版を見つけることが出来る。
3. これらの言葉は、大仰に響くかも知れないが、現存するだけで 8 万ページ以上の手稿を残したパースがここまで自負した作品は、「新しいカテゴリー表」一篇である。ただしこの論考は難解をもって知られ、次の M・マーフィーの言葉は、パース研究者によく知られている。「確かなことは、パースが出版した全ての論文のなかで、これほど本質的な論点の提示が謎めいており、専門用語の定義が多義的で、中心となる教義の公式化が要領を得ず、かつまたその内容が重要であるような論文はない」(Murray G. Murphy, *The Development of Peirce's Philosophy*, Indianapolis: Hackett Publishing Company, 1993, p. 66)。マーフィーによるこの研究書は、初版がハーバード大学出版から 1961 年に刊行されたいささか古いものであるが、初期研究のなかでは最も迫力のあるものの一つである。編年体の学術版著作集(上述W版)の刊行は、この書の登場に触発さ

れるところが大きかったと言われる。パースの遺稿編纂史ならびに現在の進行状況に関心を持たれる読者は、インディアナ大学バデュー大学インディアナポリス校での刊行プロジェクトのディレクターをつとめる André De Tienne 教授による講演スライド “A Century of Editing Peirce” (<http://peirce.iupui.edu/publications.html#century>) をぜひご覧頂きたい。

4. 若きパースとヘーゲル哲学の接点に関しては検討すべきことが多いが、パースが高校時代からカント及びヘーゲルの著作に接していたこと、1865～1866年の連続講演でヘーゲルを論じていること、1867年に入って「新しいカテゴリー表について」を発表する一ヵ月半ほど前に『エンツュクロペディー』（第二版）を新たに手にしていること、さらに1868年にはヘーゲルがパースにとっての重要なテーマとなったこと等を指摘しておこう。次の論文は、思想内容の比較には踏み込まず、主としてパースの各年代の著述とヘーゲルとの関係に調査の焦点を当てたものではあるが、両者の関係を考えるにあたって便利な手引きとなる。Fisch, M. H., “Hegel and Peirce,” in *Peirce, Semeiotic, and Pragmatism*, Bloomington: Indiana University Press, 1986, pp. 261-282.
5. それゆえカントとの類縁性を重視するならば、パースの考える「カテゴリー」は、現象一般の構造を規定する悟性的成分というより、具体的事象の構造化をそのつど担う図式性が前面に立つとも言えるだろう。実際、この頃のパースが「時間と空間 (space and time)」を「概念 (conception)」と見做していることは十分示唆に富み (W 2: 199/CP 5.223 n. 2 [1868])、後年になると〈カントは、カテゴリー表ではなくむしろ図式論から出発することが出来た筈である〉との主旨の発言もしている。曰く、「彼 [カント] の図式論 (doctrine of the *schemata*) は、後からの思いつき (afterthought) と考えるしかないものであり、彼の体系が実質的に完成してからの付加物なのである。というのも、図式 (*schemata*) が十分に早い段階で考えられていたならば、それらは彼の仕事の全体を覆って生長したであろうからである」 (W 5: 258-259/CP 1.35 [1885])。また〈conception〉と〈concept〉との違いを、〈perception〉と〈percept〉との違いに準じて考えてみることも助けになるだろう。〈perception〉は知覚の働き、また〈知覚している〉という意識に力点があるが、これに対して〈percept〉は、ふつう知覚作用が差し向けられている知覚像ないしイメージのことである。
6. William James, *The Principles of Psychology*, New York: Dover Publications, Vol.1, 1950, pp. 224-225. 原著は2巻本で1890年の刊行であるが、入手の容易なドーヴェー版はその復刻版となっている。なお同書の出版の翌年にパースは匿名の書評を発表し、ジェイムズのこの大著を「アメリカ思想 (American thought) の最も重みある成果の一つ」 (W 8: 23/CP 8.55 [1891]) と紹介していることを付記しておく。
7. パースは「新しいカテゴリー表」発表の5年後に次のように書いている。「だがカントは、自己意識を伴った認識と、自己意識を伴わぬ認識との間に相違があるにもかかわらず、「私は考える (the “I think”)」が我々の判断の全てに伴う、或いは (私が正しく記憶するなら) 伴いうる (*be able to*) のでなければならない、とする。[中略]。ところが、[論理的な観点からみて] そのために必要なのは、思惟の客体における認識された統合が存し、また [経験的な] 自我というものにもある統合が存しなければならぬ、ということだけであって、私が一方を他方に [そのつど] 関連づけることではない。そして、これは殆んどカント自身の意見 (nearly Kant’s own opinion) とみえる。というのは、彼は、私が彼を正しく理解するならば、彼の言うところの《私は考える》を、自らの現実存在の知覚、或いは何らかの事実に関する知識とは考えず、ただ客体がそのもとで思惟されることの、単に一つの形式もしくは視角とみるからである。

- 統合的に思惟する〔統覚構造の中で現象を捉える〕ということは〔そもそも現象の全領域にわたって生起するのであり〕、我々の〔それぞれの〕自我について〔一々〕考えるということとは、確かに全く別のことである」(W 3: 51-52 [1872]) .
8. 実際には三つの論考からなり, “Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man”(W 2: 193-211/CP 5.213-5.263) , “Some Consequences of Four Incapacities”(W 2: 211-242/CP 5.264-5.317) , “Grounds of Validity of the Laws of Logic: Further Consequences of Four Incapacities”(W 2: 242-272/CP 5.213-5.263)の三篇である. いずれも若々しい観察眼と鋭い知力を示す論考で, とくに第二論文は, パースが「新しいカテゴリー表」と共に「私の〔書いたなかで〕最も強力な哲学上の業績 (my strongest philosophical works) 」(MS 845: 25 [1905]) と後年に記したものである.
9. これは, むろんパースの「可謬主義 (fallibilism) 」の考えと一体であるといつてよい. たとえば『純粋理性批判』の科学哲学に関わる部分を, パースの視点からみると, 超越論的諸能力を前提にしないでも, 純粋数学や自然科学の成功は説明可能である, とパースはみる. カントが「超越論的諸能力を仮定すれば, 多くを説明することが出来る」と推論したとするなら, それは論理的には誤っていない. 私たちが最強の認識能力を持っていたならば, 純粋数学や物理学の心配する必要はおそらくないからである. だが, (超越論的諸能力を仮定しないでも, なお多くを説明することが出来る) ことをカントは見落としている, というのがパースのおよその見解である. アメリカ哲学の反基礎付け主義の根の一つはここにあるといつてよい.
10. 本稿の主題との直接の関連は多くないが, 論理学史におけるパースの輝かしい業績に関しては, 以下の拙稿がそれぞれ一側面を考察している. 石田正人「C・S・パースの量化論理について」, 『科学哲学』34-2号, 59-74頁(2001年), ならびに「C・S・パースとモデル論的論理学の初期局面」, 『科学哲学』41-1号, 29-44頁(2008年). ただし, 論理学者パースの膨大な仕事からすると, これらは高々雑語論理の構文論的側面と意味論的側面に多少の光を当てたに過ぎない.
11. この「ケンブリッジ会議 (Cambridge Conferences) 」は, 今日でいえば市民講座的な性格を持つ会合であり, 経済的に困窮していたパースを援助する意味もあって, W・ジェイムズが奔走し実施に漕ぎ着けたものである. 全8回となったパースの講演の統一タイトルは, ジェイムズとのやりとりの末に「推論と事物の論理 (Reasoning and the Logic of Things) 」と決定され, そのうち6回分の講演が『連続性の哲学』(伊藤邦武訳・岩波文庫2001年)として邦訳されている(本節と次節で取り上げる「黒板の比喻」は, 左記の邦訳書では, 263-266ページで見ることができる). 講演全体の英文テキストについては, C. S. Peirce, *Reasoning and the Logic of Things: The Cambridge Conferences Lectures of 1898*, ed. by Kenneth Laine Ketner with an introduction by Kenneth Laine Ketner and Hilary Putnam, Cambridge MA: Harvard University Press, 1992 の使い勝手がよく, 通常 RLT の略号で参照されており, 左記邦訳の底本にもなっている. W版著作集の刊行は, 現在のところ1898年のケンブリッジ会議講演まで追い付いていないが, 上記原書に収録された第一回講演と第四回講演(伊藤訳『連続性の哲学』では第一章と第二章)については, 厳密に校訂されたテキストが EP 2 の略号で知られる以下の論文集に収められている. C. S. Peirce, *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Vol.2 (1893-1913), ed. by the Peirce Edition Project, Bloomington: Indiana University Press, 1998. 普及版の CP 版著作集では, 編者によって分割された講演草稿の断片が, 必ずしも正確ではない解説と共に収録されるにとどまっている.
12. この新しい名称のもとでパースの三つのカテゴリーが姿を現すのは1880年代半ばであ

り、ケンブリッジ会議の少し前の1890年代後半からは、それぞれのカテゴリーが狭義の認識論から解放されて、より自立した形而上学的範疇としての性格を強めていく。生涯にわたってパースはカント的な視点を維持したが、(認識論の内部で自らを露わにする概念的な活動性こそ生成の本質である)と考えるなら、形而上学的省察へ移行するパースのカテゴリー論に、多少ともヘーゲル哲学との親和性が認められる。ただし既述の論理学上の相違に加え、ドイツ観念論特有の自我論や主体論とパースが終生無縁であったことは、これまでの議論との関連からも、ぜひ指摘しておかなければならない点である。ケンブリッジ会議の後には、ハーバードでの1903年のローウェル連続講演などが契機となって、カテゴリーと諸科学、記号論、プラグマティズムとの関係がより体系的に掘り下げられて行く。なおパースは、カテゴリー名を〈Firstness〉のように大文字で書き始めることが多いが、小文字を使って〈firstness〉とすることもあるので、あまり表記にはこだわらなくてよい。

13. 図2は、厳密にいうとパース自身が描いたものではなく、注11で言及した英語底本RLTの編集者が、パースの手描きの図に似せてイラストレーターに作成させたものであるが、議論の本筋には影響しないので、ここでは印字の鮮明なRLT所収の図を踏襲しておく。実際にパースが描いた図は比較的小さいものであり(MS 948: 33 [1898])、外形だけでいえば、CP版著作集所収の図(CP 6.206)の方が遙かに原図に近いので、気になる方はCP版の図を確認されるとよいだろう。わざわざこの点に触れておくのは、RLTの図の中には不適切な描き直しも認められるからである(たとえばRLT: 251 / 邦訳241頁の図は、要するに〈メビウスの輪〉のように見えればよく、左右から出会う二つの帯が中央で上下にずれている理由はない)。
14. ヘーゲルは『哲学史』のなかで、「彼[カント]が、第一のカテゴリーは積極的(positiv)であり、第二のカテゴリーは、第一を否定したもの(das Negative der ersten)であり、第三のものは両者からの総合である、と言っているのは、概念の偉大なる本能(großer Instinkt des Begriffs)である」(G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, Bd. 20, 1971, S. 345)と記しているが(カントの偉大なる本能とは言っていない点に注意されたい)、これがパースの「第一性」「第二性」「第三性」とひとまず共通の着眼となっている。また『大論理学』では、(第一のものを否定した)否定的なるものが第三のものへ移行するに際して再び否定されることから、中間項となる〈否定〉が「ある二重性として数えられる(als eine Zweiheit gezählt)」ことになり、このとき第二のものがいわば〈一、二、三〉という風に二重に数えられることから、弁証法の過程が「四分法(Quadruplizität)」にみえる、とヘーゲルは言っている(Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 6, 1969, S. 564)。このような二重性をパースのいう「三項態の第二の観念の二重分割または二分」と捉えればここでの考察には十分である(ヘーゲルは『エンツェクロペディー』中のテキスト「小論理学」でも「二重性」や「四分法」に言及しているが、説明は詳しくない)。
15. 数学史からみると、ヘーゲルは解析学の近代化に代表されるような現代数学成立の一手手前におり、これに対してパースの方は、現代数学の時代へ踏み出すところまで来ていると言っよい。同時代の数学に対するヘーゲルの関心については、『大論理学』第一巻・第二編・第二章末の「数学的無限の概念規定性」への注釈を見れば概要を知ることができる。他方、パースの数学には中々難しいところがあるが、ケンブリッジ会議の頃にパースが書評で取り上げた書物を見ると、H. Durège, *Elements of the Theory of Functions of a Complex Variable with Especial Reference to the Methods of Riemann* (1896) や J. Perry, *The Calculus for Engineers* (1897) などがあって、パースの時代の数学につい

での感触を得るには一瞥するとよいだろう（いずれも著作権が切れており、検索すればオンラインでみることができる）。

16. A. N. Whitehead, *Science and the Modern World*, The Free Press, 1967, p. 159. この著作は、数学者としてイギリスで長く教鞭を執ったホワイトヘッドが、哲学者として渡米したあとにハーバード大学で行った 1925 年のローウェル講演をもとにしたものである（これは、注 12 で言及した 1903 年のパースのローウェル講演の 22 年後にあたる）。ホワイトヘッドは、パースの論理学上の仕事には早くから通じていたが、形而上学に関しては、ホワイトヘッドがハーバード大学へ移った時点ですでにかなり円熟した思想家であったこと、またパースの形而上学関係の遺稿が未編集・未出版であったことから、パースから大きな影響を受けることはなかった。他方、ホワイトヘッドの哲学を継承した Ch・ハーツホーン（1897-2000）は、パースの CP 版著作集の編集過程でパースの草稿を度々ホワイトヘッドに見せ、結果としてホワイトヘッドは、パースの哲学について意外によく知るところとなったともいわれる。
17. A. N. Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, The Free Press, 1978, p. 62. 「色」そのものによる「客体化」は、ホワイトヘッドの著作中でもやや珍しい言い方に属するが、「質」という「永遠的客体」が与件と知覚者の主体的形式の双方を決定するという「双方向の機能 (two-way function)」を持つことは、ホワイトヘッドの名著である左記の書物の第三部で何度か言及されている。クオリアは、知覚に付帯する主観的な性質に過ぎないのか、それともクオリアは、主観性を伴う知覚経験をひそかに誘発しているのか、というのがここでの問いである。形而上学者としてのホワイトヘッドとパースは、前者の考え方は誤りではなくとも不十分であり、後者のような視点によって補われるべきである、と考えていることになる。
18. John Dewey, *John Dewey: The Later Works, 1925-1953*, Vol. 1, Southern Illinois University Press, 1981, p. 89. 即自的な「質」に関するデューイの考察は、アメリカ哲学史のなかで見ると興味深いが、現代のプラグマティズムにおいては必ずしも歓迎されないことがある。日本でもよく知られた研究者 R・シュスターマン（1949-）は、デューイの「直接的な質」の機能を 5 つ列挙した上で、次のような懐疑的な発言を行っている。「直接的な質 (immediate quality) を全ての思考や言説の背後の導き (underlying guide) とみなすかかかる説明は、デューイのような非基礎付け主義的な哲学者 (non-foundational philosopher) としては、かなり不似合い (very much out of character) であると思われる」 (“Dewey on Experience: Foundation or Reconstruction,” in *Dewey Reconfigured: Essays on Deweyan Pragmatism*, SUNY Press, 1999, pp. 199-202 を見よ)。本稿の立場から一言コメントしておく、古典的プラグマティズムは、センス・データのようなものが（基礎づけ主義）を招来するとは考えないので、わざわざ否定もしない傾向にある（パースの「新しいカテゴリー表」の §1 における「感覚印象」を想起せよ）。言い換えると、〈基礎付け主義〉を招くのは直接的な質の存在の是認というより、単にその重要性の誇張もしくは過大視である。
19. John Dewey, *John Dewey: The Later Works, 1925-1953*, Vol. 4, Southern Illinois University Press, 1984, p. 188. この後につづけてデューイは、分裂をさらに強調して次のようにも述べている。「経験される対象の二重の性格 (two-fold character of experienced objects) が〔経験者の探求を惹起する〕問題提起的な性格のもと (source of their problematic character) なのである。〔中略〕論点を定式化して述べるならば、このことが意味するのは、直接的・個体的・唯一的な本性 (direct individual and unique nature) における対象の諸特徴 (traits) と、関係や連続性における対象の諸特徴との間には、両立不可能性 (incompatibility) が存する、ということである」 (*op.cit.*, pp.188-189)。

- ²⁰ L. Wittgenstein, *Werkausgabe in 8 Bänden*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, Bd. 1, 1984, S. 34). この『論理哲学論考』の一節を『哲学探求』第一部の33節および272-279節 (*op cit.*, S. 256-257, 367-368)と比較してみよ. またウィトゲンシュタインの『心理学の哲学』619-620節 (*Werkausgabe in 8 Bänden*, Bd. 7, S. 120)をデューイからの二つの引用と比較してみよ. 本稿の視点からいえば, 『論理哲学論考』において主体ないし主観性が世界のぎりぎりの「境界」まで後退して行くことは非常に興味深いと言わねばならない.
- ²¹ Michael Tye, *Consciousness, Color, and Content*, Cambridge MA: The MIT Press, 2000, p. 157. タイは, 本人のホームページによれば, オックスフォード大学で物理学の勉強を始め, 途中で哲学に転じた. 科学的な視点を失わない論述スタイル, 安易に反表象主義に与しない姿勢, 心や意識の問題を生物一般を視野に考察する点など, 古典的プラグマティズムから見ても興味深い現代の哲学者の一人である.